〈書評〉

柘植あづみ著

『文化としての生殖技術
—不妊治療にたずさわる医師の語り—』

（松籟社　1999年　379+52頁　ISBN4-87984-209-5　2,800円）

波　平　恵美子

本書の目的について著者は次のようにいう。具体的には生殖医療の一部である不妊治療を取り上げ、その技術がなぜ生じたのか、当該文化・社会においてどのように受け入れられたのか、技術の応用が何をもたらしたのかを。さらには、何が技術の発達を進展させたのかを問題にすることであり、問題解決の手段であったはずの技術が、新たな問題を連鎖的に生じさせていることを指摘することによって、私たち人間にとって、生殖医療とはどのような意味を持つ技術であるのかを明らかにすることであると。

結論をいえば、本書は著者の目的をよく果たしており、さらには、先端的な技術一般について普遍的に適応されうる理論の構築という、著者のより大きな目標を示唆する内容となっている。

著者の以上のような目的を果たすために選ばれた不妊治療というテーマは、著者がそれまでの研究経歴の中で取り上げた、身体や医療の領域の延長線上にあると共に、何よりもその目的に添っていることを、著者は研究分析の方法を丁寧にかつ慎重に示すことで読者にアピールする。

不妊治療という技術は、それを開発し、発展させ、社会に周知させ、応用すること、そしてそれを受け入れることにおいて、立場が異なると全く違った意味を持つものである。こうした異なる立場が同じ技術でありながら、異なる意味を発するという点において、不妊治療ほど最適な例はない。著者は、中心となる分析対象を不妊治療を行っている医師と、不妊治療を受けた経験を持つ女性達に置く。こうして、技術を用いる側と、その技術の対象にはなっても、自らはその技術を用いる側には絶対に立つことのない側とに対象を二分する。

さらに、技術を用いる側は、まず次のように分類される。

＊男性か女性かの性別

＊10歳刻みの年齢段階別。この年齢段階の違いは、更に次のような立場の違いと関連してくる。

・医師としての経験年数の多少。

・職場における地位の違いから生じる医療実践上の判断や決定におけるイニシアチブの有無や強弱。治療において自らが果たす役割の違い。

・不妊治療という技術が導入された時点における、自らのそれまでの医師としての経験年数や、社会一般の、そして学会や医療機関における評価の内容。その後の変化。つまり、若い医師は、医師になった時点で不妊治療は十分に認知された技術であったのに対し、五十歳代以上の医師にとっては、それは社会全体においても医療現場においても、評価が分かれ論議の対象として導入さ

れ徐々に認知されていったものである。当然ながら、不妊治療についての認識に影響を与える。

＊医師が所属する医療機関の種類。

＊個人生活における、夫婦、親子の関係についての経験や認識についての違い。

＊生まれ育った時代的背景から生じる親子や家族についての認識の違い。

但し、この分類は分析の具体的な方法であるアンケート調査とインタビュー調査とによって、次第に現れた立場の違いである。著者が調査前から分類したのは、年齢段階だけであるといってよい。従って、より正確には、分析の結果として、以上のように医師の立場が不妊治療についての認識や態度の違いを生じさせていることが明らかになってくるということである。

不妊治療を受ける側の女性への調査はもっぱらインタビューを通してである。彼女達に対するインタビューの中での語りを通して、不妊という状況に対する女性本人、夫、夫の親（特に母親）、周囲の人々の認識や、子供を産まない女性に対する態度が明らかになってくる。治療を受ける女性の側には、当然のことながら年齢段階は一定である。職業や所属のヴァリエーションが問題になることはないが、不妊という状況の受けとめられ方が本人を中心とし、家族の関係によって異なることが次第に見えてくる。これは、著者のインタビューという調査方法への理解の深さと、テクニックの到達度の高さによって可能になったものである。

但し、彼女達のインタビュー調査によって明らかになった内容の中心は、何よりも、不妊治療という技術を受ける側の、技術を与える側との立場の絶対的な違いである。それは、医療問題において論じられることの多い「医師・患者関係」をはるかに越えるものである。「不妊」という、それが明確に病気であるか否かが曖昧であり、治療を始めるか否かが女性個人の意志にほぼ100パーセントかかっているこの治療技術においては、生命にかかわる病気に対する時よりも一層、医師の患者に対する「権力」がふるわれていることが、彼女たちの受療経験についての語りから明らかになってくるのである。不妊治療の成功率が低く、医療技術としての未熟さが、医療の側の「失敗」ではなく、あたかも治療を受ける女性個人の失敗や生殖能力の不備から生じるものであり、より欠陥の多い存在であるかのように女性に思い込ませる医師達の態度が見えてくる。医療とは何か、病気とは何か（第７章４節で特に）この問題は論じられている。

医師・患者関係が根元的に抱える問題とは何であるかが、先鋭化された形で、インタビューによる語りは如実に示している。一方、女性医師も含めて、医師の側には、治療を受ける側が感じ取られる医療を行う側が自動的に振るうことになる「権力」への認識は全くない。むしろ、治療を求める人を「救う」ために善いことをしているという意識が存在することがインタビューの内容から明らかになってくる。

このようにして、著者が主張するところの、従来の研究と本書とが異なる視点を持つことが明らかになってくる。それは、不妊治療が文化・社会にもたらす影響とそれへの対処について論じたものではなく、それよりも、技術の開発と応用を担う技術者（この場合は不妊治療を行う医師）が、いかなる意識や行動をとるのか、その結果として、その技術がいかなる論理や手続きを経て、応用され受容されたり拒否されたのか、何が問題や課題として認識されるのかについて考察し分析していくことである。著者や本研究の意義と独自性は、その態度や論理を形づくる経験や、その基になる価値観などの文化的・社会的な背景を分析することにあるといい、その目的は本書のタイトルに如実に示されている。

以上のような自らの研究に対する著者の明確な認識は、研究上の手続きに示されている。本書の前半

のかなりの部分が、分析方法の解説と、その方法を採択した自らの論理を説明することに当てられていることからも、著者の自らの研究方法への自負の大きさがわかる。具体的には分析の中心となる医師についての資料は「準自由会話方式」と著者が呼ぶところのものである。それは、予め仮説を立てての半構造的な聞き取り調査を行うが、インタビューを受ける側の自由会話的な部分、さらには、言語化されていない情報である語り手の戸惑いや思考のプロセスを示す意味不明の発声や沈黙なども、重要な部分では記述している。

さらには、調査対象の位置づけについて注意深く論じる。不妊治療を行う医師が、医療全体の中でしめる位置づけを示すことで、不妊治療そのものの医療技術の性格と、日本社会との関係を示し、分析の手続きの正当性を主張する。例えば、開業科でみれば「産婦人科」は、「産科」の10倍、「婦人科」の約5倍である。このことから、女性の生殖と、女性の生殖器に関わる疾病とが一括されて医療の対象となっていることがわかる。不妊という現象が「女性の生殖器の欠陥」として、必ずしもそうでないにもかかわらず、とらえられ、不妊治療の主流もそうした医療の構造が背景になって形成されていることが明らかにされる。又、患者の全てが女性であるのに、女性医師は10パーセント台であり、完全に男性優位の世界であることがわかる。新しい技術が開発され、試されるのは大学病院であり、大学病院における男性優位の構造を併せ考えると、不妊治療が、女性のみを対象とした、男性の論理に発する治療技術となることは当然の帰結であるといえよう。そのことが、患者である（あるいは患者であった）女性達の語りの中で次々と明らかにされていくのである。特に、終章の「なぜ不妊治療技術は進展しつづけるのか」は、子供を産む、あるいは産まない、産めないこと、親子と家族の関係、女性であることのアイデンティティ、病気観と不妊などの問題を改めて取り上げ、不妊治療という技術が、非常に深く社会・文化と関わっていることを論じることにおいて優れている。

編集上において付録資料として、日本産科婦人科学会の不妊治療に関する見解を付していること、詳細な用語解説を付け、さらに読者のより便利なようにしおりの形で、ピンク色の用語集を添えていることにも見られるように、著者は読者の便利を図ることに細やかな目配りをしている。

以上のように、本書は、充分に、そのタイトルと本書の最初に述べられている著者の目的に適う力作である。書評者はこのように高く本書を評価したうえで、次のように著者のさらなる論議を期待する。

(1) 本書は副題が示すとおり、不妊治療を行う医師の語りが分析の中心である。患者の語りは、医師の語りを相対化するために用いられたにすぎない。そのため（あるいはやむを得ず）医療の具体的な関係は両者の間に成立していない。次の段階として、患者の語りの中で明らかにされた不妊治療が持つ様々な問題について、同じ医師達がどのように評価するかを問うてもらいたい。現段階では、患者の語りには副次的位置しか与えられていない。全体的に見ると、技術を行使する側とされる側とが併置された形となっている。医療批判でもなく、医師への反省を迫る形でもなく、患者の明らかにしてくれた不妊治療というものの姿を医師がどのように認識するかを明らかにすることによって、著者の提示する問題はより高度なものになるだろう。

(2) 子供を産まないことについてのさらなる分析を期待する。患者の語りの（記載されている）中心は、不妊治療についてである。記述からは、なぜ彼女達が不妊治療を行うようになったのか充分な背景や動機が明らかではない。語らなかったのか、記載しなかったのかが明確ではないが、不妊治療の進展は、実は少子化現象と、著者も終章で論じているように、深く関わっている。少子化は、未婚と晩婚

とによって引き起こされており、結婚した女性は子供を持つ率が高いことから、結婚した女性が子供を持つことを当然だと考えたことが語りの全体からは見えてくる。しかし、不妊治療という未だ少数派の治療に踏み出す個人の個別の動機は明らかにされていない。家族像が大きく関わる問題であると同時に、女性のアイデンティティ形成に深く関わる問題であることを考える時、個々の動機がもっと明らかにされる研究に期待する。

(3) 不妊治療の情報の流され方についての全体的分析を示してもらいたい。著者も論じているように、妊娠ではなく出産の成功率は一桁であるにもかかわらず、妊娠の成功率が発表されており、不妊治療はあたかも完成された医療技術であるかのような受け取られ方をしていることが患者の語りからは明らかである。学会レベルはともかく、社会全体に、先端の、ないしは開発中の技術がどのように周知されていくのか、それが新しい技術の進展に大きく関わるからこそ、この点は著者の大きな研究目的に適うテーマではなかろうか。

(4) 最後に、方法論上のさらなる発展に期待する。著者が繰り返し述べているように、テーマがテーマであるだけに、個人のプライバシーを侵害しないことに配慮しつつ、しかも協力してくれる調査対象者を得にくいテーマを扱ったという状況の中で、考慮のうえに考慮を重ねた方法であることがよくわかる。そのうえでなお疑問が残るのは、何を基準として、対象者の語りの中から選ばれたものが記載されているのかということが明らかにされていないということである。逆に言えば、長い語りの中で、何が記載されなかったのかということである。繰り返し部分やプライバシーを明らかにする部分が記載されなかったことは述べられているが、それ以外に、彼らは何を述べたかということが、実は重要ではないかと考えるのである。語りを中心的研究資料とする書評者も未だ解決し得ない方法論上の問題であるが、「聞き取り資料の恣意的使用」という問題を解決していく方法論上の手法を開発していただきたい。

（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長・文教育学部教授）